

困っていることのなかにこそ 多様な活動展開の種がある

評者 金子玲大 (徳島県上勝町地域おこし協力隊 石積み学校)

地域の住民になり、活動するところが地域おこし協力隊のおもしろいところだ。地元の人に話を聞くと、手入れができていない果樹や畑があるとよくいう。なぜかと聞くと歳をとって草刈りや収穫がづらいから、手間暇がかかるのに大したお金にならないからと答える方が多い。そこから都市部の人を集めるアイデアや、高値で売る方法が思い浮かぶ。

とはいえ実質的な生活を支えるのは、日常の草刈りや水路掃除や寄り合いなど地味な行ないだ。華々しい活動も大切だが地を這う活動も大事だ。そこが地元民でもありよそ者でもある地域おこし協力隊の悩むところであり、おもしろいところでもある。

本書からは各地で協力隊やその

OBとして活躍する人が、どんな考えで取り組みを進めてきたのか、何に悩み、楽しんできたのか知ることができる。また、困難を乗り越え、事業をスタートアップする物語としても読める。空き家を借りるのに2カ月間交渉を続けた話や地元の方の家でご飯を食べてつながりが強くなる話など、具体的なエピソードは読んでいて楽しい。

この先、田舎の取り組みを持続的なものにするためには、昔の技術、生活や食文化を発掘し、もう一度価値化することが大切だ。地域の本質的な価値を見つければ、困っていることの手助けにもなるし生活の糧にもなる。地域の人のみならず外の人も巻き込める。例えば傾斜地の農地を支える石積みいしづみの技術は古い技術と思われ



『地域おこし協力隊 10年の挑戦』

椎川 忍・小田切徳美・佐藤啓太郎ほか 編著

農文協 1800 円+税